

末黒野

すぐろの

10月号

(通巻926号)



青瓦

森清堯

一斉に影を転ずる目高かな
子ら来たり紫陽花の径漕ぐやうに
水打てば踏み石の顔あらはなり
灯台へつづらの径や額の花
風ひらり夏の字ひらり麻暖簾
山裾の雨意の朝風栗の花
回廊の崖沿ひの磴五月闇
青鷺の立ち岩棚の晴れ舞台
水中花世渡り疾うに無縁なり
崖下の青瓦照り凌霄花
草笛や得意顔にはほど遠く
日を弾き磴を過りぬ瑠璃蜥蜴

女神の壺

岡野里子

代田水心の乾き満たすやう
翻る蓮の葉風の浄土池
ゴンドラは宇宙浮遊や夏の海
噴水や女神の壺の秘むる彩
ラジオよりシヨパンの調べ梅の雨
改札に残る貸し傘梅雨の隙
遊山舟奇岩巨岩を躲しつつ
波尖る岩場の流れ風涼し
靄ごめの山また山や遠閑古
風死してより川端の賑はへり
ギヤマンの小さき湖や白ワイン
十階やスカイツリーと夏雲と

瑞声

夏の星

黒滝志麻子
(顧問)

萍の寄り分かれては日に遊び
上げ潮のぬらす継橋夏の星
天守に灯入るや鵜舟の動き出す
校庭の隅々たたき大夕立
山法師にはかの雨の横なぐり
光風や夏帽を脱ぐ遭難碑
山ひだの盛り上がりたる青葉かな
ほうたるの火の影にあり遠き師よ

甲矢集

鞍馬の風

小田嶋野笛

再会の老の旅行着総レース
川底の青き小石や囀鮎
木の間より鞍馬の風や鮎生簀
ト口箱に鱧のつの字や錦小路
星形の器きらめく鱧の皮
電話の声洩るる置屋や梅雨深し
ところてん下戸も上戸も同期生
かき氷のふはり二人はひとりもの
憂さ捨ててまた憂さ拾ひ梅雨の月
木の晩や師の悌の水カンナ

スパイス

森清信子

気ままな風気ままに染めて七変化
噴水や時はこぼれてつかみ得ず
校庭の白線滲み梅雨に入る
潮の香を孕む小島や花とべら
賑やかな漁師の妻ら鱈を干す
かき氷部活の大きバッグ置き
サンダルの異国の少女海開き
白帆ゆく沖のきらめき夏帽子
カレーには喝のスパイス梅雨晴間
竣工の間近き校舎山帽子

浮苗

石黒興平

水に揺れ風に撓めり花山葵
反転の緋鯉の渦や波の綺羅
筆太のどぜうの文字や夏暖簾
投網打つ古戦場なる川の瀬に
ひとむれの鳥低く飛ぶ梅雨かな
キャンパスも病舎も沈み梅雨深し
八橋の一角へ影半夏生
手がこひの蛍見せ合ふ二人かな
浮苗を直すに忍び足めきて
しなやかなる指に黒文字水羊羹

青嵐

太田良一

駅ひとつ残すふる里田水張る
明易や車夫の客待つ東口
滴りの壁に梵字のやぐらかな
地下街に届く怒号や荒神輿
海鳴りを呼ぶや和太鼓青嵐
飛魚の飛び立つ波や荒磯海
父の日や家の誰もが口にせず
炎日や遠祖の墓の遠かりき
砂浜は古戦場跡風死せり
疎開地を訪ぬる旅の土用かな

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



夜の秋

今村千年

捨て舟の揺蕩ふ梅雨の三溪園
夕闇の谷戸の坂道八重葎
出目金が好きで保育所休みがち
追憶はなべて美し昼寝覚
梅雨晴間杖つきながらポストまで
尼寺の跡と伝へて青山椒
いつしかに街の明かりも夜の秋

五月晴

池谷鹿次

祭 笛

池乗恵美子

短夜や明けゆく山の薄煙
見はるかす磯は弓なり小鰯刺
湖を掠め高舞ふ夏つばめ
螢火や山を隔てて幹線路
浜菅や捨て舟砂に埋れをり
刈り込みのをちこち聞こゆ五月晴
蟬時雨僧の説教聞きもらす

八丁目なれど銀座や薔薇香る
隠沼や白雨に鷺の身じろがず
平らかに風をのせをり額の花
波音の郷引き寄せて籐寝椅子
天敵も大河も知らぬ徒歩鵜かな
短夜や未完の夢を夢に追ひ
背に躍る町名太し祭笛

沙羅の花

大川暉美

川明き

高木邦雄

蹲踞へ朝日一条苔の花
梅雨晴や競ひて礫切る親子
隠沼の闇の深さよ墓
限りまで白百合ひらく夜の仏間
父の忌や開き初めたる沙羅の花
渡し舟待つや目深に夏帽子
ペリー碑へ風煽煽と夏の夕

花山葵安曇野渡る朝の風
川明きの利根の早瀬や竿しなる
緑蔭や将棋の駒の音響き
川漁師の網打つ大河梅雨晴るる
万緑やさこんた響く峡の里
蟻螻にまとはれ急ぐ野道かな
千年余眠りし蓮の彩清か

半夏生

岡田史女

合歓の花

長尾タイ

明け方の静けさにあり蟬の声
アカシアの散り布く川のほとりかな
風音の中の川音燕とぶ
半夏生夜更けの風のつのるかな
髪洗ふ足裏の火照りそのままに
夏草や山のふもとの道祖神
足元のふらつく日なり夏の蝶

短夜や昨夜の夢を手繰り寄せ
白靴を揃へて明日の早出かな
ペダル踏む虹のトンネル追ふ少女
町川の浅瀬漁る通し鴨
山の宿岩魚彩る化粧塩
梅雨の雷ワイングラスを傾けぬ
奥谷戸の水音かすかや合歓の花

青炎集

森清堯選



浦安 東 正 則

金雀枝のうねり豊かや老の夢
黒南風や海の暗さをたたみ込み
昼顔へ寄する白波智恵子の碑
彩りの冷し中華や置き手紙
雷鳴にそそのかされてもう一杯
採血の良き診断や宵涼し

横浜 大内由紀

明六つの鴉声かしまし枇杷熟るる
千枚田の白鷺一羽光り翔つ
水鏡のたちまち碎け大夕立
手のひらの人生模様水中花
草取や陣地広ぐるやうに取り
花合歡や早や山門の夕間暮れ

横浜 渡辺美智子

湿り帯ぶる風の匂へり半夏生
プランターの胡瓜素直に育ちけり
登り来てうなじを撫づる風涼し
いつしかに青柿数を減らしけり
仲の良き向かう三軒皆涼し
足裏にも思ひ出のあり夏の浜

大 網 白 里

髪切つて襟足さらり立葵
若竹の藪の境の風鬼かな
擬宝珠を離るる風や日の暮るる
清清しき朝の飛翔や練雲雀
甚兵衛着て保育園児の得意顔
漆黒の仏の湯呑晩夏光

鈴 木 礼 子

わたくしてふ言の葉に酔ひ花菖蒲
父の日や仕草父似と笑はれて
あんみつと同時に言ひて大笑ひ
向き合うて雨止むを待つ夏の茶屋
飛び石の先に友居て夏座敷
河骨の花を浮かせて宿の池

横浜 市川夏子

会ひませうと言ひて四度目の夏来る
ぼうたんの持ち堪ふるや夜半の風
山と山つなぐ吊橋閑古鳥
遊船の水路下りや鳥の声
天上の光集めて朴の花
万緑やさらりと読める寺縁起

横浜 六崎正善

堂の灯や読経流るる五月闇
無住寺の暗き石段百合の花
六月や堰をた走る水の綾
いかづちに生まるる闇の深さかな
炎屋や鉛のごとき靴の底
海風の崖に一閃夏燕

横浜 小池桃代

樹下行けば襲ふ鴉や梅雨に入る
広重の雨の斜めや菖蒲園
神園の梅の実分けて余りけり
同窓の長生きばかり軒風鈴
往年の昼はカツ丼夾竹桃
荷解きの花屋の朝や胡蝶蘭

横浜 岩上行雄

百年の木造牛舎夏の空
子羊の群れを目に追ひハンモック
たたみでは開く躊躇ひ梅雨の空
日盛の畑は草臥れ寡黙なり
四五匹の水輪の円舞あめんぼう
遠耳にやまぬ泣き声熱帯夜

東大和 谷口律子

琉金を加ふる鉢や水光り
舞ひ上がる畑の匂ひや夕立晴
打水の坪庭光る町家かな
湧き水の瓜を冷やせり竹の樋
百選の澄める棚田の夕立かな
奥宮の見えぬ高嶺や山開き

耕 土 集 岡野 里子 選



草食むは山羊の仕事や夏野原
雲の峰ゆつくり進む沖の船
潮騒は流人の声か浜万年青
夕暮の風のせせらぎ合歓の花
太陽の光を囃し蝉時雨

横浜 鈴木 英雄

打水や柄杓自在に虹を生み
輩翠や水底めざし一直線
草いきれじつと我慢の隠れんぼ
木々の葉の白き騒めき青嵐
負うた児の寝息かすかや合歓の花

横浜 森川 享

前山の深き緑や烏栖み
小判草些些なる風にさわさわと
朝採りのトマトのジューズ水代り
玉葱や莖三つ編みに吊しけり
夏木立翁三人の釣り談義

横浜 白居 澄子

猫二匹と寝てゐる冥加明け易し
里帰り麦湯煮る香に迎へられ
ビール注ぎ耳に溢るオノマトペ
白靴や少女の歩幅颯爽と
あをあをと茅の輪明るき雨に立つ

文京 大曲ゆき枝

稚児として祭終へたり子の寝息
真夜中の茶の間の月下美人かな
忠実に老いを暮して豆の飯
鰹下げて漁労長の帰宅かな
黒潮の船を待ち居り白日傘

宮城 京極 久也

禅寺の険しき磴や時鳥
冷奴摺む手加減箸加減
どんよりと雲張る空やけふの夏至
宇宙望遠鏡の捉へしものは蝸牛
ご鬚眉の顔ををさまる団扇かな

横浜 小林 拓路

晴れの日の目を射る窓の緑かな
蓮の花天上の笑みこぼしけり
夏の霧岬隠して見ゆる波
夏至の夜の満天の星きらめきて
参道の茂みに消ゆる子鹿かな

横浜 古宇田伸子

昔日の色香を今に古代蓮
湯上がりの子ら白塗りや天花粉
保線夫や水飲む間なき炎天下
二人連れ祇園囃子に背を押され
短夜や寝つけぬままに聞くラジオ

横浜 久島しんの

真夜の雷打ち重なりて響みけり
岩かげの雷鳥親子尾根の風
朝顔市濃きや淡きやとつおいつ
夕立過ぎからす水浴ぶにはたづみ
アイゼンと夫たよる歩や大雪溪

横浜 近藤 知子

沙羅の花ほとりと昼の静けさに
通院の帰りの車窓枇杷熟るる
追憶を呼び覚ますごと合歓の花
池の辺の青鷺見入る塑像かと
古本屋ひよいと覗くや梅雨晴間

横須賀 小島 澄子

病葉へ一筋の日矢池の端
埴鳥の地鳴き合戦夏木立
紫陽花の新種原種や三百本
白百合の花序は年輪外を向き
朝取りの弾くる茄子光る紺

横浜 海老原真澄

青山の木々の匂ひや夏来る
大空をふさぐ大樹や楠若葉
仰ぎみる木漏れ日ゆれて若楓
街はづれゆらぎの強き青田面
万緑を抜けて葉山の海展け

横浜 西 計郎

伽藍堂へ続く道なり花あやめ
富士望む池のほとりや新茶の香
命日の読経や空へ夏の蝶
かき氷イチゴミルクを三溪園
冷房や六腑に白湯の沁み渡る

横浜 津野 桂子

誰彼の元気羨み梅雨の晴
露涼し朝の散歩の立ち話
白皿に青きパセリの残りけり
寝むれぬ夜窓を開くれば梅雨の月
午後の日の二階の窓や青簾

横浜 廣部 尚美